

裂して 2 層になり、その上層の中央から根の生長点組織が分化し、下層から根冠が分化してくる点は、*m* 層から分化する点では異なるがテンニンカ科のテンニンカ (*Myrtus communis*) の胚形成に類似している。ゼンチュウゲ科の胚形成はアキグミの場合とはかなり異なるが、大きく見れば同一の分化様式に入るものと考えられる。Cronquist (1968) や Takhtajan (1969) はグミ科をヤマモガシ目 Proteales に関係づけているが、胚形成の点からはあまり関係がなさそうである。

□JIBP Synthesis vol. 8: **Studies in conservation of natural terrestrial ecosystems in Japan** (editors M. Numata, K. Yosioka and M. Kato) pp. 157, University of Tokyo Press 1975, III. これは約 8 年間にわたる生物の動態を追及した委員会 (CTP は日本のフロラと植生、とくに森林のフロラと植生及び珍稀な植物を扱い、CTS は動物のフロラと群集とを扱った) がまとめた総決算ともいえるもので、vol. 9 の動物を扱ったものと同時に出版された。これには日本の主な生態学者 38 名が関与しており、いわば日本を舞台にして日本人が演じた最高の演技といえるものである。

はじめに全体として気候、土壌、フロラ、植生の概観を挙げ、ついで第二章として琉球亜熱帯、小笠原亜熱帯、暖温帯、混淆林、冷温帯、亜寒帯、冷温帯以上の混淆林、二次林、高山帯、湿原、海岸、ササ林、火山帯、植林地、竹林、耕地及び雑草地に類別し、夫々が分担して執筆している。全体としてみて分担者が多いために学名が違って使われていたり、主な群落は挙がっていると思うがいささか要約が強すぎてわかりにくい嫌いもある。

第三章は稀少植物とその保護で蘚苔類、地衣類、菌類、シダ類、種子植物と分けてあるが、蘚苔類では遠く外国に分布するものを主とするに反して、地衣類は日本固有に重点を置いている。菌類は甚だ少なく、シダ類は固有、隔離分布、遺存の三種に類別し、種子植物では細かい産地に種名だけを並べてあるなど不統一である。これらはもっと整理してほしかった。

第四章は人類の影響による植生の変化で、花粉学から見た影響、耕作地、薪炭材の切り出し、家畜の飼食と野火、境内林、工業化等に伴う変化を述べ、第五章に植生の保護を扱い最後に結論を与えている。

多少の不揃いはあるとはいえ、日本の現状における結果として、人と植生と共に今後の注意を惹くものと考える。

(前川文夫)

□白井光太郎: **植物妖異考** pp. 376, 1925. 復刻版 1975. 有明書房、東京、¥5,000. 近年種々の書物が復刻されるが、これもその一つ。原版を引きのばしたので文字が大きくなり読み易くなったが多少間の抜けた観なきにしもあらず。白井先生がよく古書を渉猟されたことに改めて感じ入る。

(前川文夫)